



国際教養大学学長(国際社会学者)

## 中嶋 嶺 雄

### プロフィール

1936年松本市生まれ。東京大学大学院修了。社会学博士。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、アジア太平洋大学交流機構(UMAP)国際事務総長など歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員、(財)大学セミナーハウス理事長など兼務。平成15年度「正論大賞」受賞。  
〈著書〉「現代中国論」「北京烈烈」(サントリー学芸賞受賞)。「中国の悲劇」「21世紀の大学」「中国暴発」など多数。



日中関係がギクシャクしています。中国は最近の日中交渉においても東シナ海のカス田開発や尖閣諸島の領有権、さらには靖国問題などを次々に持ち出してきました。日中関係は歴史的にも文化的にも「異母兄弟」のような間柄ですから、ひとたび関係がこじれると他人同士とは違って和解しがたいだけに、日本側も言うべきことははっきり主張すべきだと私は言いつづけてきたつもりですが、中国を刺激しないことを優先してきた「日中友好」外交のツケが、今日全面的に表に出ているといっても過言ではないでしょう。

明治期に日本に滞在したイギリス公使のアーネスト・サトウは、「外交とは知性(intelligence)と気転(tact)を働かすことだ」と述べていますが、日中国交以来のいわゆる「日中友好」外交にはそのような「知性」や「気転」はなく、もっぱら「日中友好」という情緒に左右されてきたといえましょう。だから尖閣諸島の問題でも鄧小平が1979年秋に来日し、「この問題の解決は次の世代、次の次の世代にゆだねればよい」というと、すっかりその気になって安心していたのですが、中国側はその鄧小平が全面的に権力を握っていた1992年2月に全国人民代表大会常務委員会という目立たない場で「領海及毗連区法」(領海および隣接区法)という法律を国内法として決定し、尖閣諸島を中国の領海内に位置づけてしまっているのです。そのとき日本政府・外務省は「知性」と「気転」を働かして外交的措置を講ずるべきであったのに、何もなかった結果が今日の事態を招いているのです。

これまで総額7兆円にもものぼるODAをはじめ「日中友好」のために中国への経済援助を続けてきたのに、中国側がそのことに感謝するどころか、みずからの軍事力強化を棚上げして、「日本軍国主義」を批判したり、日本の国連安保常任理事国入りに反対するのは、まさに、こんなに立派な国を作っている日本という存在が目障りだからなのです。自分たちが戦後どれだけうまく国造りをやってきたのか、権力闘争ばかりで社会は安定していなかったし、今も国中が乱開発です。安物の建造物を造っては壊し、壊しては造っていて、いつ果てるともない工事現場のようになっている。従って国内総生産(GDP)は確かに膨らむかもしれませんが、全体的には歪んだ経済発展です。環境破壊が進み、資源は枯渇し、さらには貧富の差が広がっています。中国社会自体は本当に成熟したい国家になっているだろうか。言論の自由があるだろうか。学問の自由は保障されているだろうか。こういうことを一つとっただけでも大変深刻な問題があるわけです。中国は経済的に発展したというけれども、それは色眼鏡で見るとそうなるんです。たしかに北京の繁華街・王府井一帯の変貌は目覚ましく、東京の六本木とお台場が一挙に集まったかのようです。しかし、同じ北京の中心部でも、私自身が定点観測をしてきた東四の裏通りや東廠胡同のあたり、天安門広場南の前門地下道や前門大街に近い裏通りなどは、

以前とまったく変わらずに目を覆いたくなるような貧困と不潔が今も続いています。市の西方へ約三十キロばかりタクシーを飛ばして、観光客の行かない首都鉄鋼総公司のある国有企業地域の町などでは、経済発展とはどこの国のことかと思われる光景に出くわします。

この格差がすごい。一人あたりの所得格差は百対一です。我が国は四対一ぐらい。台湾が六対一ぐらい。そういう中国社会を相手にしていくことは大変なことです。中国の脅威はたんに軍事力のみならず環境や人権という面での社会的脅威も大きいので、日本としてはやはりそこをよく考えていかねばなりません。

ここで、ちょっと台湾のことについて触れてみたいと思います。

最近の中国では、昭和20年に、日本はもう中国に降伏したかのように教えられています。中華人民共和国ができたのは1949年ですから、日本は中華人民共和国に降伏しているわけではないんです。中華民国、蒋介石政府にです。この四年間の意味は本当に大事ですね。

そして、蒋介石の息子の蔣経国はそれなりに色んなことを考えて、李登輝さんに譲った。私も実は蒋介石時代の独裁的な台湾は嫌いで、中華民国はあまり好きではなかったんですけども、とにかく李登輝さんになってからは完全に民主化しました。近く邦訳される李登輝筆記『見證台湾』、邦訳（『李登輝実録—台湾民主化への蔣経国との対話』産経新聞社発行、扶桑社発売）に出っていますが、私の著作を詳しく読まれていた李登輝さんの求めで私が初めてお会いしたのは1985年3月です。中華世界において民主化なんて本当に有史以来、初めてです。皇帝型権力構造の中国で選挙によって首長を選ぶ、こうした台湾の政治発展自体が中国の指導者にとっては目障りだったのです。

それから、もう一つ中国にとって目障りだったのは台湾アイデンティティがますます強くなること。これはいくら軍事力や政治力あるいは外交によって押さえようとしても押さえきれない台湾の国民意識の成熟です。だからこそ中国はこれを軍事力で押さえなければならなくなります。しかし、中華人民共和国は一度も台湾を統治していません。政治はもとより軍事や外交だって経済だって教育も文化もみんな台湾自身でやっているわけですから、台湾は立派な主権独立国家です。ここに中国の一番の弱みがあるんです。だから、強がりと言う。強がり言うことがアジアの平和や安全を脅かすことになってはなりません。

いずれにしても、日本は非常に多く中国の文化的影響を受けながらも、まったく独自の文化をつくっています。なぜ日本には茶道があって中国には茶道がないのか。中国ではお茶の種類も飲み方も色々あるし、おいしい中国茶もあるけれど、茶道はありません。日本の茶道はまさに日本の文化です。一期一会の文化であって、まさに日本的美意識、日本的な美です。中国の陰陽二元的な美意識からは出てきません。利休の「茶の心」は中国にはないんです。陸羽というお茶の神様はいますし、茶室もあるんだけど、いわゆる日本の茶道における茶室とは全く違ってしています。そういう意味では、日本と中国との間には大きな違いがあり、日本は文化的に独自の創造をしています。

日本は日本なりの文化を、日本なりの歴史を自分達できちんとしていけばいいのです。そして、日本は中国ばかりかヨーロッパの文化やアメリカの文化の影響を大きく受けながら実に巧みな自己創造をしています。日本および日本人というものに自信をもって、ぜひこれからも力を合わせていい社会をつくってゆきたいものだと思います。

中国の主張に迎合することではなく、日本は自己主張すべきであり、今の中国は信頼できない、中国は嫌いだというコンセンサスが最近の世論調査では大きく形成しようとしています。このようなコンセンサスがさらに固まるのだとしたら、最近の日中関係の悪化も「日中友好」の代価として甘受できるように思える昨今です。



'06 春

# ニューバナー君

第13号



FIFA WORLD CUP  
GERMANY  
2006

MATCH BALL

ニューレジストン